九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

D.H. ロレンスの『狐』に見る狐の象徴性 : 眠りの両義性からの再解釈

田島, 健太郎
九州大学大学院 : 博士課程

https://doi.org/10.15017/4377732

出版情報：九大英文学. 62, pp.17-33, 2020-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

D. H. ロレンスの『狐』に見る狐の象徴性
――眠りの両義性からの再解釈 [1]

田島　健太郎

序

『狐』（“The Fox”）は、第一次世界大戦の終戦後間もなく（1918 年の末ごろ）に執筆され、幾度の改稿を経て 1921 年に現在の形になった、D.H. ロレンスの代表的な中編小説である。F. R. リーヴィスが「ロレンスの主要な中・短編の中でも最高のものの一つ」と評したように（256）、その表現力はしばしば高く評価されるが、その主題提示の一貫性、結末におけるバンフォード殺害の倫理的問題、結婚したマーチとヘンリーの関係性の曖昧さなど、さまざまな問題点を孕む作品でもある。

この作品に登場する狐の象徴性に関しては様々な解釈がなされるが、作品中盤でヘンリーが狐を射殺することの意味について、有効な解釈を加えた研究はあまり多くない。先行研究を２点挙げれば、ブライアン・ファルマーの論考と、中村嘉男の論考が挙げられる。しかしながら、これら２点の先行研究は、マーチの無意識に入り込む狐の影響を重要視するものの、どちらも「意識／無意識」ないし「覚醒／眠り」といった複雑で矛盾するモチーフを有効に説明できていないように見受けられる。しかし本作において無意識や眠りのモチーフをいかに解釈するかは、言うまでもなく、結末の解釈――つまり、マーチの眠りと覚醒との間での揺れ動きをどう説明するかに関わってくるのである。

そこで本稿では、狐が象徴するものの本質を「根源的生命」と捉え、ヘンリーによる狐の射殺が、プロット上でどのような意味を持つのかを探ってみ

[1] 本稿は日本ロレンス協会 50 周年記念大会（2019 年 6 月 8 日、於 慶應義塾大学日吉キャンパス）における発表内容に、加筆・修正を行ったものである。

たい。今回打ち立てた仮説は、ヘンリーがマーチと狐との連関を断ったために、マーチは「根源的生命」との連関を得る場所／媒体を喪失し、最終的には理想的な生の在り方を見失っているのではないか、というものである。これを検証するために、眠りや無意識といったモチーフに注目し、狐の死が物語の展開にどのような影響を及ぼすのかを検討する。

1. 狐の象徴性

狐という動物の象徴性は、本作を論評する上で避けては通れない論点であり、多種多様な解釈が提示されてきた。まずは先行研究の傾向を整理してみたいと思う。作品冒頭では、マーチとバンフォードの思うに任せぬ農場経営が「不毛」のモチーフ（卵を産まない鶏）によって印象づけられることから、二人が「不毛」なレズビアン的関係に陥っているとする解釈がしばしば為される。[2] 二人がレズビアン的な関係にあったか否かはさておき、男装をして農場の力仕事を一手に引き受け、口を「痛みと皮肉を感じているかのように引き結び」、しばしば嘲るような冷笑を浮かべるマーチの姿には、「何やら奇妙で説明されていないもの」がある（8）。より創造的な木工仕事に精を出したいという願望があるのにもかかわらず、家禽の世話に明け暮れていることにも、彼女はフラストレーションを感じている。こうした描写から確かに汲み取られる事実として、狐やヘンリーと対面する前のマーチはある種の自己実現の欲望を抑圧しており、自身が置かれた状況に対する漠然とした、しかし無意識であるがゆえに強烈な欲求不満を抱えていることが指摘できる。狐＝ヘンリーとの接触は、マーチの抑圧された欲望に明確な方向づけを与え、突破口を開く前触れとなるのである。

マーチが初めて狐の姿を目にして「魔法に囚われた」ようになる、次の描

---

[2] 例えば、清水康也はバンフォードとマーチの関係性を「心身に柵をめぐらす事によって生命の流れから切り離された、不毛の愛であり自然であった」とした上で、沈滞化した日常生活や人々の「心身の澱み」（ノモス）に「侵犯者」ヘンリー（カオス）が変化をもたらすという解釈を示し、カオスの創造性を提唱する（清水 68-71）。エドマンド・バーグラーは精神分析の見識に照らして、本作がレズビアンでマゾヒスティックなマーチの「不変の内なる防御」や「偽攻撃性」を正確に描写しているという（Bergler 50-51）。後述するウォルケンフェルドの論考にも、女性同士のホモセクシュアリティを不妊・不毛の問題と関連付けている箇所がある（346）。

写を検討する。

> She lowered her eyes, and suddenly she saw the fox. He was looking up at her. His chin was pressed down, and his eyes were looking up. They met her eyes. And he knew her. She was spell-bound. She knew he knew her. (10)

この場面では狐が彼女の何を「知った」のかが問題になるが、例えば富山太佳夫は、聖書における動詞 "know" の用法が性的な交わりを含意したことに触れ、狐とマーチの「エピファニー」の場面には「性の交わり」の可能性が示唆されていると指摘する（151-52）。また飯田武郎は、ここで狐がマーチの生命を本能的に感じ取るのであり、この瞬間の刺激が彼女の「抑圧された動物的生命力」に対する感性、ひいては「異性を求める無意識的欲求」を覚醒させるのだと説明する（114）。本作のプロットを眠り姫のモチーフで説明するスザンヌ・ウォルケンフェルドも、狐は「除外された男性のセクシュアリティ」やその「根本的な暴力性」を体現し、マーチを「無意識の官能的次元」へと誘うという（347）。他に、本作を性的アイデンティティの混乱という観点から読み解いたジャン・グッドは、狐はヘンリーのファルスの象徴であると同時にマーチ自身の精神の中にあるファルス的要素をも体現している、と説く（220）。このように、狐の象徴性の解釈には、作品全体に対する解釈の差異によってヴァリエーションが生じてくる。しかし総括して共通点を示せば、狐は動物的・官能的次元との連関をもった存在であり、それがマーチの意識下に潜む女性としての自己実現の欲望に訴えかけているのである。

マーチがヘンリーと出会った日の夜に見る夢には、狐の姿に仮託された魔術的な力の存在を確認することができる。夢の中で彼女は「戸外からの歌声」、「彼女には理解できない……野と闇の中をさまよっている歌声」を聴き、心揺さぶられる（20）。外に出て、その声の主が狐であることを直感した彼女は、「トウモロコシのように黄色く輝く」狐を発見し、「彼に触れたい」と思って近づき手を伸ばす。すると狐は尾で「彼女の顔をサッと払い」、「それが彼女の口を焼き焦がし、強い痛みを与えたので、あたかも彼の尾が燃えているかのようであった」。狐の体色がトウモロコシの色に喩えられていること、またバルバートが指摘するように、燃える狐の尾が魂の再生を象徴する不死鳥の

モチーフに通じることから、この夢における狐は豊穣と生命力の象徴であるといえる（217）。加えて、この場面の着想となった可能性のあるフレイザーの『金枝篇』では、豊穣を祈るケルト人の祭祀において、魔女が変身した姿だと信じられた様々な動物（猫や蛇など）が焚き火の中に投じられたことが記されており、そこには狐も含まれる（656-57）。アリストテレス以降の西洋において土の冷たさと結びつけられてきた狐は、同時に大地が持つ豊穣性を体現し、さらには火炎色の毛皮によって浄化のイメージをも持たされていた（Wallen 58）。このため、狐を炎に投じて犠牲にすることには、狐の持つ「炎の力を社会的にポジティヴな目的に向け直す」、いわば昇華の意味があるという（Wallen 60）。狐は自然の根源的な生命力を体現する存在であり、ロレンスの燃える狐は、このような昇華を性愛の文脈にまで拡張して担わされている。上記の夢の中で、狐はマーチの潜在的な異性愛に対する欲望を、より創造的な方向へと開花させることを暗示しているのである。以上述べてきたことから、狐が「根源的生命」の権化であり、異性愛に基づく官能の次元へマーチを導く存在であるという解釈は、広く受け入れられるものだと言える。

2. ヘンリーの人物設定

さて、狐は単に官能性や生命力を体現するだけでなく、女二人で農場を切り盛りするマーチとバンフォードの目を盗んで家禽を捕食するなど、「蛇」（10）のようにその姿を捉え難く、「悪魔」（9）のように悪辣、かつ狡猾なハンターである。言うまでもなくヘンリーにもこうしたハンターとしての側面があり、先行研究では伝統的にヘンリーと狐をほぼ完全に同一視する傾向にある。しかしイアン・グレガーは、ヘンリーが常に狐に例えられるのに対し、狐がヘンリーと似ているとされることはない、という非対称を指摘する（Gregor 14）。本作を取り扱った先行研究の大半に見られる傾向として、「ヘンリー＝狐」の構図は、根本的にマーチが見出す図式であることが見落とされがちである（中村 193-94）。さらに重要なことに、ヘンリーは確かに狐じみた青年として描かれるが、作品後半部では狐に例えられることがほとんど全く無くなるのである。よって以下では、敢えてヘンリーを狐から切り離す方向で、ヘンリーに独自の特徴を確認してゆく。

先に結論を述べると、狐の本質である「根源的生命」の兆候は、実際の人間であるヘンリーには、ほぼ無いと言っても過言ではない。狐の射殺を皮切りに、むしろ彼の若者らしい不条理な激情や残忍さ、破壊性などが強調されるようになる（倉持 24)。ヘンリーに創造的要素があるとする伝統的な批評は、バンフォードを死と結びつける前提に依拠した上で、ヘンリーによるバンフォード殺しを、「死に対する生の勝利」と位置づける傾向にある（Moynahan 199)。[3] そこで本論ではまず、ヘンリーという人物の内面描写に注目してみたい。作中で描かれるヘンリーの哲学は、鹿狩りになぞらえられる「意志と意志の戦い」と、「意志を沈潜させた女性の愛の形」の二つであるが、これらはヘンリーの深い人間性を示す上で、意義あるものと言えるだろうか。またヘンリーの性愛そのものに対する認識、姿勢はどのように描かれているだろうか。

まず「意志と意志の戦い」は、マーチへ求婚を思い立つ場面で次のように独白される。

> It becomes like a fate. Your own fate overtakes and determines the fate of the deer you are hunting....It is a subtle, profound battle of wills which takes place in the invisible....
>
> He was a huntsman in spirit, not a farmer, and not a soldier stuck in a regiment. And it was as a young hunter that he wanted to bring down March as his quarry, to make her his wife. So he gathered himself subtly

[3] F. R. リーヴィスは、本作の主題である「愛の研究」(260) を完遂させるために「ヘンリーはバンフォードの死を意図しなければならなかった」と擁護し (263)、バンフォード殺害は「本質的なロレンス的な劇の意義を完成させる外的事件」であったと解釈する (264)。ジュリアン・モイナハンも同様の立場を取り、リーヴィスの解釈を死と生の二項対立の構図で補強している。しかしこのような解釈に対して、早くも 1950 年代には反論が為されている。イアン・グレガーは、ロレンスが「生」や「自然」といった観念に結びつく比喩の乱用、および現行版で付け加えられた結末（特に人生論の文脈）によって、ロレンスが恣意的にヘンリーを救世主に仕立て上げたのだと指摘する。なお、この恣意性批判に関しては、P. T. ウェランが修正を試みている。ウェランは『恋する女たち』(*Women in Love*) や『虹』(*The Rainbow*) など複数のロレンス作品に共通して現れる「ハンターと獲物」の比喩を吟味し、「狐」における捕食者ヘンリーの姿がポジティブに描かれるのは、ロレンスの男女関係に対する捉え方が過渡期にあったからだと指摘する (279)。

together, seemed to withdraw into a kind of invisibility. (24)

それは物語のクライマックスへの伏線でもある。後に木を伐採する際の事故に見せかけてバンフォードを殺害しようとするヘンリーは、「恐ろしい純然たる意志」でもってバンフォードの死を望み、あたかもバンフォードの運命をその手に握っているかのように、冷徹な計算に基づいて行動する（65）。これらの場面から、読者は「狩人」ヘンリーの精妙な、まさに超人的なほどの動物的本能と、強靭な意志力、破壊的なエネルギーを感じ取る事ができる。しかし、だからといって、即ちヘンリーが根源的で創造的な生命に関わりがあるとは言い難いのではないか。

次に彼の女性一般や結婚に対する価値観を見れば、それらは必ずしも深い意義を持つものとは言い難い。確かに彼はマーチの中性的な容姿や、無防備なぼんやりした目、辛辣な話しぶりなどに魅力を感じている。だが、マーチとの結婚を思い立つ直接的なきっかけとなるのは、次に引用するように、ベイリー農場を自分のものにしたいと「抜け目なく」（shrewdly）考えたからである。

> And he thought to himself, it would be a good thing to have this place for his own. And then the thought entered him shrewdly: why not marry March? ...When he thought of her dark, startled, vulnerable eyes, he smiled subtly to himself. He was older than she, really. He was master of her. (23)

そしてマーチとの結婚後、ヘンリーは独立した意志を以て愛する相手のために骨折ってきたというマーチの愛の在り方を認めず、己の意志を意識下に沈潜させる類の、受動的な愛を求めている。その言外の要求をマーチも感じ取っている。

> And [March] could not quite accept the submergence which [Henry's] new love put upon her. If she was in love, she ought to *exert* herself, in some way, loving. She felt the weary need of our day to *exert* herself in love. But she knew that in fact she must no more exert herself in love. He would not have the love which exerted itself towards him. It made his brow go black. No, he wouldn't let her exert her love towards him. No, she had to

> be passive, to acquiesce, and to be submerged under the surface of love. (67)

なるほどマーチから見た客体としての、ヘンリーの "physical presence" には、狐のそれを思い起こさせるような妖しい魅力があり、根源的生命への思慕を惹起するという、その範囲では創造的と言えるかもしれない。だが、主体として感じ考える、人間としてのヘンリーには、そうした要素を見出すことは難しいのではないだろうか。

以上述べてきた問題点については第 4 節で更に展開することにして、次節では狐の死の前後の状況を確認し、狐の死が「無意識」や「眠り」といった要素に与えた影響を検討してゆく。

3. テキストの改稿と「眠り」の両義性

マーチは冒頭から、しばしば次の引用に掲げるような奇妙な表情を浮かべている。

> The wisps of her dark hair blew about her as she stooped, her eyes were big and wide and dark, when she looked up again, strange, startled, shy and sardonic at once. Her mouth, too, was almost pinched as if in pain and irony (8)

マーチの「大きく見開かれた暗い目」は、ジュディス・ルーダーマンの指摘によれば女性の性器の象徴であり、その「受容的な」目を通じて狐が彼女の精神に侵入することから、こうした描写はマーチが「性交渉を欲しつつ同時に恐れもする処女的な女性」であることを示唆する（256-57）。また、マーチの男装が彼女の「内部亀裂の表象である」と解釈する鉄村春夫は、「バンフォードとの倒錯した関係がマーチの豊かさの部分を歪めて」おり、そのことへの「不満、羞恥、皮肉」が彼女の表情に表れるのだと述べている（鉄村 92, 93）。自分の置かれた現状に対してマーチが訴えるフラストレーションに、どの程度セクシュアリティが関係してくるかは批評家によって見解が分かれるところだが、確実に言えるのは、マーチがバンフォードとの関係性や共同生活に対して何か満たされないものを感じており、そこには「生産性や創造性の欠如」というイメージが重ねられていることである。例えばマーチは木工

と建具工を学んでおり、暇があれば自分で磁器の絵付けや火格子を拵えたいと思っているが、思い通りにならない家禽のために彼女の創造性は妨げられている（9）。

このようなフラストレーションを抱くマーチは、作品冒頭から「二重の意識」とでも呼ぶべき心理状態に陥っている。

> She was half watching, half musing. It was her constant state. Her eyes were keen and observant, but her inner mind took no notice of what she saw. She was always lapsing into this odd, rapt state, her mouth rather screwed up. It was a question, whether she was there, actually consciously present, or not.
>
> ...March looked at it all, saw it all, and did not see it.... What was she thinking about? Heaven knows. Her consciousness was, as it were, held back. (10)

彼女の意識が表層ではいつものように機能しているのに、深層では「いわば抑えられて」いるという、この状態について、鉄村はマーチの無意識が狐の魔術にかかる運命を望んでいたのだと解釈し、「レディネスが完成している」と表現する（89）。この「レディネス」が完成した心理状態では、マーチの無意識は、意識的自我の統御から解き放たれ、無防備に晒されていることになる。ルーダーマンはマーチの瞳孔が「受容的に開く」（dilate receptively）と表現し、そこから狐が彼女の精神に侵入するのだと述べていたが（257）、実際にマーチは無意識の領域を支配されたような状態に陥る。

> March also was not conscious that she thought of the fox. But whenever she fell into her odd half-muses, when she was half rapt, and half intelligently aware of what passed under her vision, then it was the fox which somehow dominated her unconsciousness, possessed the blank half of her musing.... And it always recurred, at unexpected moments...there it was, the fox, it came over her like a spell. (12)

意識の部分はバンフォードとの日常生活に充てられている一方、無意識の領域は断続的に繰り返し再現される狐の印象に占められ、マーチにとってはいわば自我が分裂したような状態になる。ヘンリーが初めてベイリー農場を訪

ねてきた夜、マーチはヘンリーを狐と同一視し、「それ以外の見方ができなく」なってしまう（14）。

> He was identified with the fox—and he was here in full presence. She need not go after him any more. There in the shadow of her corner she gave herself up to a warm, relaxed peace, almost like sleep, accepting the spell that was on her....Hidden in the shadow of the corner, she need not any more be divided in herself, trying to keep up two planes of consciousness. She could at last lapse into the odour of the fox. (18)

ヘンリーの姿に狐の要素を見出すと、マーチは「意識の二つの領域を保持しようと」骨折る必要が無くなったと悟り、「眠り」のような安寧を感じる。「完全な存在として」現れたヘンリーを求めれば、「根源的生命」の化身であった狐をも追うことにもなるので、意識と無意識の現実が一致する。マーチにとっては、バンフォードとの生活のような日常の次元にある自我と、狐の生命力を追い求める無意識の自我とを融合させられるからである。

本作の「眠り」の象徴性に関しては、第一に＜根源的生命がもたらす豊かな生＞、第二に＜無意識への没入＞という二つの層の問題が混在することを指摘したい。例えば作品冒頭に見られるようなマーチの半覚醒状態は、＜豊かな生＞が見いだせない状態を指し、単に無意識に没入しているだけである（10）。これに対して、狐とヘンリーが現れた後の眠りのような状態は、＜無意識への没入＞および＜豊かな生＞の両方を満たせていることになる（18）。もちろん、この問題は結末の解釈にも関わってくるだろう。マーチがヘンリーの求める新しい愛、即ち自我を意識下に沈潜させるような愛し方を実践出来ずにいる場面でも、無意識への没入がすなわち豊かな生に結びつくと言えるのかが、問題となるからだ。

この問題——「眠り」のモチーフの両義性という問題は、テキストの改訂という別の論点にも関わってくる。何故ならば、“The Fox” が構想された当初は、＜豊かな生＞と＜無意識への没入＞という二層の問題が錯綜することなく、完全に連動していたと考えるからである。ここでテキストの成立過程を確認すると、ロレンスはまず 1918 年末に初版である 20 ページほどの短編を完成し、これがまず雑誌に掲載される。次いで 1921 年にロレンス自身の手

で大幅な改訂を行い、三倍近くの長さの中編小説に発展したものが、"The Captain's Doll," "The Ladybird" の二編と併せて一冊として出版された。現行のケンブリッジ版の基となっているのが、この 1921 年版である。

初版と現行版の最大の違いとして、初版では狐も含め、誰も死なずに済む結末が用意されている。現行版ではマーチがヘンリーの求婚になかなか応じないのに対し、初版ではあっさりと靡いて婚約し、バンフォードの怒りにも構わず二人は間もなく結婚する。初版の結末は次のように語られる。

> March was so curiously happy. This also angered Banford. She could not bear to see the secret, half-dreamy, half knowing look of happiness on March's face. It seemed wicked. March seemed to her to have a secret wickedness, gentle, receptive wickedness, like a dream.
>
> In March the dream-consciousness now predominated. She lived in another world, the world of the fox. When she dreamed, the fox and the boy were somehow indistinguishable. (228-29)

この結末では、マーチは象徴的な眠りの中に理想的な性愛関係を見いだせており、ある意味ではおとぎ話的な、望ましいエンディングだったと言える。ウォルケンフェルドが指摘するように、「眠り姫」の原型をなぞった単純な構成であった（346）。またヘンリーと狐はマーチの中で渾然一体となり、さらにマーチの眠り（つまり無意識への没入）は、即ち狐の根源的生命へのアクセスを意味していたと言える。

これに対し現行版では、「覚醒と眠りとの間の葛藤」という結末に向かって、「意志と意志の戦い」という最大のテーマが追加された。ロレンスが「意志と意志の戦い」の文脈を導入したことによって、現行版では異なる人格を持つもの同士が否応なく葛藤を繰り広げ、理想の性愛に辿り着くことの難しさが強調されるようになった。それに従って、眠ることの価値基準も多層化し、冒頭では眠りが豊かな生のモチーフであったのに対し、結末では女性が（男性的な）意思を保持することの是非に焦点がすり替わっているのである。

では、どこからその焦点が変わるのか。それは狐の射殺の周辺、つまり狩りの文脈が付け足された箇所からだと考えられる。ウォルケンフェルドが指摘するように、現行版で加筆された後半部分が始まる辺りから、ロレンスは

ヘンリーとバンフォード、そしてマーチの熾烈な「情念の戦い」に重点を置くようになる（Wolkenfeld 348）。例えばヘンリーがマーチとの結婚を決意する場面は 1918 年版にも存在するが、“He was master of her”（23）という言及は 1918 年版にはなく、現行版になってから追加されたものである。ヘンリーは 1918 年版では「意志と意志の戦い」の哲学を語ることもなく、狐を撃つこともなく、バンフォードを殺すこともなしにマーチと結婚する。テキストがおとぎ話から、個と個がせめぎ合い葛藤するドラマへと変容したがゆえに、ヘンリーは凶行に及ぶキャラクターに作り変えられるのである。

4. 狐の死の意味

それでは、実際にヘンリーが狐を撃つ現行版に焦点を戻し、狐の死の意味を考察してゆきたい。最初の段階として、マーチは狐と出会って以来、無意識における狐との一体化に耽溺している。ファルマーは、以下に示すように、彼女がヘンリーを狐と同一視することによって、ヘンリーの魔力が彼女の意識を圧倒した時にだけ、その強すぎる意志を沈潜させられるのだと説明する。

> In order to release herself to Henry, she must first put to sleep her will, her efforts to maintain her assertive identity. Afraid of Henry the man, she is able to submerge that will only by thinking of Henry as the fox; or, more properly, when he, like the fox, hypnotically overpowers her consciousness. (Fulmer 278-79)

マーチが無意識の次元に陥ったときにヘンリーを狐と同一視しており、彼女のヘンリーとの交流はその同一視（identification）に依存している、という指摘は重要である。ヘンリーが結婚を迫る間（これは狐の射殺後の場面だが）マーチが繰り返し答えをはぐらかす際に使うフレーズは、“I don't know”である（54）。マーチはあたかも「知ること」——つまり、ヘンリーが求める意味において二人の関係性を「知る」ことを拒絶するように、彼が説く理想的な夫婦像に対する不信感を示し続ける。一度目の求婚が有耶無耶にされた後の場面で、マーチは戸外から狐の声が聞こえてくるように思う。それから不意に、同じ部屋にいたヘンリーと目が合った瞬間、彼女は思わず“There he is!”(31) と叫ぶ。この“he”は明らかに狐のことを指しており、彼女は人間であ

るヘンリーの目に、己が無意識のうちに渇望してきた狐の視線を重ね合わせているのである。このような状況下でヘンリーが狐を撃った理由は、狐との無意識の一体化／忘我の状態からマーチを引きずり出し、彼自身との結婚という現実に向き合わせるためだったといえる。個と個が互いの自我を主張し、互いを圧倒しようとする現行版の文脈では、ヘンリーにとってマーチを自分の妻、自分の女にできるかどうかは死活問題である。そのためにマーチの脳裏から狐を抹殺し、人間としての自分に目を向けさせる必要があったのだ。

それでは、狐の死は物語にどのような影響を及ぼすだろうか。狐を撃った場面で、ヘンリーの銃声は「夜を粉々に打ち砕くかのように」響き渡り、既に床に就いていたマーチとバンフォードを起こしてしまう (39)。前述のファルマーは、マーチとヘンリーとの交流が、マーチの無意識における狐との同一視に依存していることを指摘していた。

> Since the fox becomes, for her secret self, a desirable object of mediation between her and Henry, she cannot shoot it, but Henry, as sly as the animal, can; and doing so, he shoots the object upon which she has externalized her soul, thus severing the already weak link between them. (279)

ファルマーは更に、上の引用のように、媒介としての狐を射殺することによって、ヘンリーがマーチとのリンクを断ち切ってしまった可能性を示唆している。この指摘をもとに、狐の死の意味について新たな解釈を試みたいと思う。

まず、ヘンリーが銃声でマーチの眠りに揺さぶりをかけたその晩、彼女は二番目の夢を見る。夢の中でバンフォードの亡骸を粗末な木箱に収める際、中敷きとなるものを見つけられない彼女は、泣く泣く狐の毛皮を使うことにする。すると狐の毛皮は「真っ赤な、燃えるような布団」となり、彼女は泣きながら目を覚ます (41)。この夢はリーヴィスの論考のように、バンフォードを排除したいマーチの願望の表出だと捉えられる (263) ことがある。しかし、狐の死がマーチに与えた衝撃がこの夢を見させたことを考えれば、マーチの涙は狐に対しても向けられているという見方も出てくるのではないか。

この夢から覚めた朝、マーチはヘンリーが吊るしておいた狐の死骸に触れる。

> She was wondering, wondering, wondering over his long, fine muzzle. For some reason it reminded her of a spoon or a spatula. She felt she could not understand it. The beast was a strange beast to her, incomprehensible, out of her range. Wonderful silver whiskers he had, like ice-threads. And pricked ears with hair inside. But that long, long, slender spoon of a nose! – and the marvellous white teeth beneath! It was to thrust forward and bite with, deep, deep, deep into the living prey, to bite and bite the blood. (42)

ここで注意したいのは彼女が最初の夢の中で狐に「触れたい」と願っていたことである（20）。この場面ではまさにその願望が叶ったはずなのだが、彼女が触れられたのは狐の亡骸——つまり生命の抜け殻だった。そうなると、狐を「理解できない獣」、「手の届かない」存在と見るマーチは、狐の死によって真実希求していたものとの一体感を喪失したことを、ここで予感しているのではないか。つまり、前夜の夢で狐の皮をバンフォードと共に葬ったのは、狐との決別をも意味するのである。狐の死はバンフォード殺害の前奏であり、ヘンリーの破壊性ないしハンターとしての能力を証明するものだから、という説明もありうるだろう。だがそれだけでは、この夢においてバンフォードと狐の毛皮が同時に葬られることの説明がつかないのではないか。むしろ（夢の中にせよ翌朝の場面にせよ）毛皮になり犠牲となった狐が体現するものと、ハンターであるヘンリーが体現するものとは別のものであると捉える方が、第二の夢の場面に関しては解釈がしやすい。

狐の死後、マーチはヘンリーに測り知れない魅力を感じつつも、自分が彼と結婚したいのかどうかを本当には把握できないまま、勢いに圧されて婚約する。しかし重大な変化として、彼を直接的に狐と同一視する描写は、狐の死を境にパッタリと無くなっている。また次の引用のように、婚約の後ヘンリーは軍の駐屯地に帰ってゆくが、それを見送るマーチは「人生のなかで real な全てのものが後退してゆく」ように感じる。

> And with big dark eyes she watched him go, and it seemed as if everything real in life was retreating as the train retreated with his queer, chubbed, ruddy face, that seemed so broad across the cheeks, and which never seemed to change its expression, save when a cloud of sulky anger hung

on the brows, or the bright eyes fixed themselves in their stare. (56)

それから9日後にマーチはヘンリーに婚約解消を申し出る手紙を送り、その中で自分にとってはバンフォードの方が遥かに real なのだと思い直したという。

> When you are there you seem to blind me to things as they actually are. You make me see things all unreal and I don't know what.... You are an absolute stranger to me, and it seems to me always be one. So on what grounds am I going to marry you? When I think of Jill she is ten times more real to me. (57)

ここではロレンス作品にしばしば見られるように real と unreal を反転しているが、要するにマーチにとって real だったのはヘンリーの "physical presence" であり、彼の言葉や思想など、社会的存在としての人間存在は unreal だったのだと言える。つまり、マーチが人間としてのヘンリーに直面すると、複雑な人格の非キツネ的側面は unreal と感じられるのである。

第2節でヘンリーの人物設定が狐の創造性を体現しているとはいえないことを指摘した。ここで、例えばリーヴィスが本作を一人の若者の成長を描いた作品であると解釈する際に言及している、意味深長な場面を検討してみたい（262）。狐の射殺後、マーチは初めて作業着ではなくドレスを来て現れ、その姿は「柔らかく女性らしく」、あたかも「別の存在」になったかのようである（49）。マーチの姿に見惚れるヘンリーは、「女性の柔らかい、スカートを履いた脚」を垣間見せる彼女が「手の届く」（accessible）な存在になったと感じ、次のような「男の運命」に目覚める。

> [A]nd strangely, suddenly, he felt a man, with all a man's grave weight of responsibility. A curious quietness and gravity came over his soul. He felt a man, quiet, with a little of the heaviness of male destiny upon him (49).

この「責任」ないし「運命」が何を意味するかは、かなり漠然としている。だが物語の展開上、ヘンリーの「運命」とは、マーチをバンフォードの影響下から引き離し、最終的にはバンフォード殺害に至るまでの一連の道程に他ならないはずであり、それゆえに結末の倫理的な評価にも関わってくる重要な問題点なのである。この点について、バルバートの論考が有用な指摘をし

ている。バルバートが解釈するところの「責任」ないし「目的意識のある方向性」とは、具体的にはバンフォード殺害に対するマーチの罪悪感を、ヘンリーも共に引き受け、「闘う」ことを含む（226）。バルバートは、マーチが結婚後に至っても独白では彼を "boy" と呼んでいることに着目し（"She would have to leave her destiny to the boy – But then the boy" ["Fox" 69]）、彼のヒーローとしての成長が完了していないことを示唆する。結局のところ、ヘンリーは未だに男性になりきらない「少年」であるが故に、その「責任」を全うできず、結末における二人の関係性には一種の「ためらい」が残るのである（Balbert 226）。

加えてバルバートは彼の性的な未熟さにも言及する。ヘンリーは一種の素朴な感性でもって、バンフォードの「小さな鉄の胸」と対比して、マーチの豊かな胸を空想する（48）。だがバルバートによれば、ヘンリーの「欲望のトーンはむしろ思春期の少年が女性の身体に対して抱く、自慰行為的な期待のそれであり、前ファルス的かつ猥褻な好奇心においてはほとんど子供じみてさえいる」（223）。第 3 節においてテキストの改稿を取り上げたが、二つの「狐」を比較する際、年齢は重要な要素になり得る。先に述べたように、初稿の結末でヘンリーと結婚したマーチは、創造的な生命のエネルギーが横溢する夢の世界に没入し、一種の理想的な生を享受していた。だが奇妙なことに、そこでは "the boy" としてのヘンリーと "the old man" としてのヘンリーが、狐と渾然一体となって息づいている（229）。初稿のヘンリーは現行版のヘンリーよりも遥かに狐との結合が強く、狡猾であり、それ故にマーチにとっては「年をとった男」のようにも見えたのである。女性に対して支配的・抑圧的な初稿版のヘンリーは、マーチとバンフォードの嫌悪感にもかかわらず、ほとんど何の骨折ることもなくマーチと結婚することに成功する。これに対して現行版のヘンリーはバンフォードとマーチの両方から "the boy" と軽視され、若さゆえの強引さ、非情さが強調され、終いにはバンフォードを殺すことによってしかマーチの愛を勝ち得ない、未熟な青年に作り変えられているのである。

結語

本稿では、狐の死が、マーチの満ち足りた「無意識の中での安らぎ」、「眠り」から、その本質とも言える「根源的生命」の要素を抜き去る引き金となることを主張した。流れとしては、まず狐に出会ったマーチは、無意識に没入するだけで豊かな生を生きられる可能性ないしヴィジョンを垣間見る。この段階では、眠りの中で無意識と根源的生命の要素は一致していた。しかし、そこに結婚を巡り「意志と意志の戦い」という文脈を持ち込んだヘンリーが、狐を射殺する。こうしてヘンリーが狐とのコネクションを断ったがために、マーチは「根源的生命」との連関を得る場所を失って、豊かな生を生きる可能性を見失う。あとは無意識に落ちるか意識を覚醒させるかという、ヘンリーが彼女に突きつけた「自己実現」の課題が残るのである。狐の死によって、マーチは人間としてのヘンリー自身に目を向けるようになる。しかしその関係性は一種の抜け殻であり、一見理想的な絆に発展する可能性がありそうでも、実はマーチが希求していた「根源的生命」の要素は抜け落ちているのではないかと考えられる。つまり、ヘンリーではなく狐の方にこそ、マーチが希求していたものの本質が秘められていたのである。

バンフォードの死との関連について述べておくと、バンフォードの死は、豊かな生を生きられる可能性を見失ったマーチが、「古いタイプの愛」に戻ることを不可能にする点で、決定的な打撃であることは確かである。しかし、肉体に宿る動物的な要素を遥かに超えて、より複雑な人格を持つ人間との間では、「根源的生命」との連関を保つことは困難を極める——そうした現実問題をあぶり出すという意味では、狐の死はバンフォードの死と同じくらい重要な意味を持つのではないだろうか。

引用文献

Balbert, Peter. "Freud, Frazer, and Lawrence's Palimpsestic Novella: Dreams and the Heaviness of Male Destiny in *The Fox*." *Studies in the Novel*, vol 38, no. 2, Summer 2006, pp. 211-33.

Bergler, Edmund. "D. H. Lawrence's 'The Fox' and the Psychoanalytic Theory on Lesbianism." *A D. H. Lawrence Miscellany*, edited by Harry T. Moore, South Illinois UP, 1959, pp.

47-53.

Frazer, James George. *The Golden Bough: A Study in Magic and Religion*. 1922. Abridged ed., Macmillan, 1950.

Fulmer, Bryan O. "The Significance of the Death of the Fox in D. H. Lawrence's *The Fox*."*Studies in Short Fiction*, vo. 5, 1968, pp. 275-82.

Good, Jan. "Towards a Resolution of Gender Identity Confusion: The Relationship of Henry and March in *The Fox*." *The D. H. Lawrence Review*, vol. 18, 1985-86, pp. 217-27.

Gregor, Ian. "*The Fox*: A Caveat." *Essays in Criticism*, vol. 9, 1959, pp. 10-21.

Lawrence, D. H. *The Fox, The Captain's Doll, The Ladybird*. Penguin, 2006.

Leavis, F. R. *D. H. Lawrence: the Novelist*. Chatto and Windus, 1955, pp. 256-65.

Moynahan, Julian. *The Deed of Life: The Novels and Tales of D. H. Lawrence*. Princeton UP, 1963, 196-209.

Ruderman, Judith G. "'The Fox' and the 'Devouring Mother.'" *The D. H. Lawrence Review*, vol. 10, 1977, pp. 251-69.

Wallen, Martin. *Fox*. Reaktion Books, 2006. Animal Series.

Whelan, P. T. "The Hunting Metaphor in *The Fox* and Other Works." *The D. H. Lawrence Review*, vol. 21, 1989, pp. 275-90.

Wolkenfeld, Suzanne. "'The Sleeping Beauty' Retold: D. H. Lawrence's *The Fox*." *Studies in Short Fiction*, vo. 14, 1977, pp. 345-52.

飯田武郎. 「動物寓話と民話から見た『狐』」. 『D. H. ロレンス『狐』とテクスト』, 富山太佳夫/立石弘道(編), 国書刊行会, 1994, pp. 106-25.

倉持三郎. 「『狐』と戦争：「若い兵士」としてのヘンリー」. 『D. H. ロレンス『狐』とテクスト』, 富山太佳夫/立石弘道(編), 国書刊行会, 1994, pp. 23-41.

清水康也. 「『狐』——構造としての侵犯者」. 『D. H. ロレンス『狐』とテクスト』, 富山太佳夫/立石弘道(編), 国書刊行会, 1994, pp. 65-86.

鉄村春夫. 「ある＜眠り姫＞ヴァージョンとしての『狐』」. 『D. H. ロレンス『狐』とテクスト』, 富山太佳夫/立石弘道(編), 国書刊行会, 1994, pp. 87-105.

中村嘉男. 「D. H. Lawrence の "The Fox" における狐の死の意味するもの」. 『英文学研究』, 日本英文学会(編), 59 巻 2 号, 1982, 191-200.